

# 二つの運命

小川未明

青空文庫



風かぜの出でそような空そら模様もようの日ひでありました。一いぴきのせみが、小ちいさなこちように出であいました。

「なんだか怖おそろしいよな空そら模様もようですね。今夜こんやはあれるかもしれませぬ。早はやく家うちへ帰かえりましよう。」と、せみはいいました。

正しょう直じきなこちようは、空そらを見み上あげて、

「ほんとうに暗くらくなりました。あんなに雲くもゆきが早はやうございます。早はやく家いえへ帰かえりましよう。」と答こたえました。

そこで、ふたりは、風かぜに吹ふかれながら空そらを飛とんできましたが、小ちいさなこちようは、おくれがちなので、せみはもどかしく思おもいました。

「こちようさん、あなたのお家はどこですか。」とききました。

「私の家は、あちらの花圃です。あすこには姉も妹もきて待

っています。」と答えました。

「あんな頼りのない花圃なんですか、今夜の大風をどうし

て、あんなところで防ぐことができますか。」と、せみはあきれ

たような顔つきをしました。

こちようは、また空を見上げました。ますますものすごく空の

景色はなつていくばかりです。

「あなたのお家は、どこですか。」と、こちようはせみにたずね

ました。

「私の家ですか。それは大きな木です。もうすこしいくと、その

木が見えるはずで。こんもりとしげっていて、風や雨が、めつたにさらすものではありません。どんな大風が吹いても、それは安全なものです。私たちには、とてもあなたのようなおぼつかない生活はできないのです。」と、せみは得意になって答えました。

あちらには、黒いこんもりとした大きな木が見え、こちらには、きれいな花のたくさん咲いている花圃が見えました。二人は、別れなければなりませんでした。

「そんならこちようさん、今夜をお気をつけなさいまし。また、ふたりが無事でしたら、お目にかかりましょう。」と、せみはいました。

「あなたも、どうぞご機嫌よう。わたしは、あなたの幸福を神さまに祈っています。」と、こちようはいいました。そして、右と左に分かれていきました。

「ほんとうに、あの哀れなこちように、ふたたびあわれるだろうか。」と、せみは途すがら考えました。

はたして、その夜の暴風雨といったら、たとえようのないほど、ものすごかったのであります。せみは、大木に止まっていたましたが、幾たび振り落とされようとして、びっくりしたかされません。そして、ろくろく眠ることすらできなかつたのです。しげった枝の間から、雨は落ちてきました。大波の打ち寄せるように、また水の泡だつように、葉は音をたてて騒ぎました。せみ

は不安ふあんで生きていいるような気持きちはしなかつたのです。

「かわいそうに、この暴風雨あらしで、あのこちようは死しんでしまつたろう。」と、せみは、怖おそろしいうちにも、こちようのことを思おもひ出だしていました。

翌よくじつ日、雨あめがはれ、風かぜが止やむと、せみは花はな圃ばたけの方ほうへこちようのようすを見みようと飛とんでいきました。そのとき、ちようど彼かれは、こちように出でてきました。

「ご機嫌きげんよう。」と、こちようは、せみに声こゑをかけました。せみは意外いがいに思おもつたような顔かおつきをして、

「昨夜ゆうべは、なんともありませんでしたか。」と、たずねました。

「たいへんな暴風雨あらしでございましたね、みんなは抱だき合あつてふる

えていました。私はどうなることかと心配しましたが、それでもみんなは無事でございました。お日さまが出られたので、このとおり元気になりました。」と、小さなこちようは勇んでいいました。

せみは、心の中でこちようを不憫に思いました。昨夜は、幸いに助かったが、このつぎの暴風雨のときには、きつと花は散り、こちようは死んでしまおうだろう。それに気づかないとはかわいそうなものだと思いました。

「こちようさん、だんだん秋が近づいてきました。みんなが死を考えなければならなくなりました。」と、せみはいいながらも、自分だけは、あの大きな木のしげった中に身を隠していれば、寒



くなつたつて、そんなに怖ろしいこともないだろうと思つていたのです。

「私は、寒くなることを考えると身ぶるいします。私のすみかにしては、あのやさしい花が散る日のことを考えると私は、身を切られるように感じます。」と、こちようは怖ろしさに身を震わしていいました。

「おたがいに、こうして達者でいましたら、またお目にかかります。いまのうちに、うんとあなたは舞つたり、踊つたりなさいまし。」と、せみは、こちようをかわいそうに思つて、こういつて、なぐさめまして、いづくへともなく立ち去つてしまいました。

日にまし、風が強くなつて、いままで南から吹いたものが、西

から吹き、北から吹くようになると、遠い、高い山の雪の上を越えてくるとみえて、風は、冷たく、寒くなりました。こちようは心配げに見えたのであります。

元氣よく鳴いているせみの声は細っていきました。この世の中が急にこんなに変りましたので、ふたりは、もう、たがいにであつて物語をするようなこともなかつたのです。

それは、みんなの虫類にとつて、このうえもない怖ろしい霜の降つた日のことです。夜が明けると、あたりは音もなく静まりかえつて、草や木の葉はみんな白くしておれていました。そして、すべての虫がたいてい、夜の間で死んでしまつたらしいのです。

その大きな木の下には、自分だけは生き残ろうと空想したせ

みが死骸しがいになつて地ちの上うえに落おちていました。そして、はや、小ちいさ  
 なありどもが、どこからかその死骸しがいをかぎつけてきていました。  
 花はな圃ぼたけにいつてみると、無残むざんにも花はなは頭かしらを地ちにつけて見る影かげ  
 もなかつたけれど、まだ小ちいさなこちようは抱だかれていました。こ  
 ちようど花はなは最後さいごまで助たすけ合あつて、運命うんめいに身みをまかせていたの  
 です。花はなに止とまつたこちようは破やぶれた羽はねをかすかに動うごかして、い  
 まにも太たい陽ようの上のぼるのを待まっているのです。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

※表題は底本では、「二つの運命《うんめい》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 二つの運命

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>